

瞬く間に広大になったトマト畑を、曖昧な眼差しで眺めていたベルギーは、重い溜め息を吐き出していた。

ベランダに腰かけたまま、沈痛な面持ちを宿しているベルギーに、心配そうに覗き込んできたのはロマーノだった。

「何かあったのか？」

十数年の月日が流れても、まだ小柄なままのロマーノに、柔らかく笑いかけたベルギーだったが、切ない目は消えていなかった。

それが、却って心配になったロマーノは、動揺を露わにしたが、ゆっくりと手を伸ばしてくるベルギーに、優しい手付きで抱き抱えられる。

ロマーノを膝の上に乗せたベルギーは、小さな姿を羨ましそうに見つめた。

「ロマはええなあ…」

自分勝手だと理解しつつも口にしたベルギーは、意味が分からないと言いたげに、小首を可愛く傾けているロマーノに、ふんわりと笑いかける。

「ホンマ癒されるわく、ずくくと、小さいまんまで…ほんで親分にも、めっちゃ大事にされとって…なんか、妬けてまうわ」

なかなか成長出来ないのは、ロマーノ自身にも問題があるもの、それ以上に、スペインが過保護すぎる事が、更なる拍車を掛けている。

ぬるま湯のような生活はあるが、時には不満になる事

も多いロマーノは、不貞腐れたように目を伏せると、ベルギーの胸元に顔を埋めていく。

スペインの産業が発展すると共に、成長していくベルギーは、僅かに残っていた少女の面影も消え失せてしまった。

徐々に豊満になっていく胸元や細い腰付きは、最早、成人女性と変わりない。

しかし、国を傾けまいと、朝から晩まで働き続けるスペインは、そんなベルギーに目を向ける事もなかった。

それが、悔しくて仕方がないベルギーは、鬱屈する心情を溜め息に変えていく。

「なんで残つてもたんやろ…こんな事になるんやったら…あの時に、出て行った方がよかつたんやろか…」

一滴の滴がベルギーの頬を伝つていく中、何も言えなかったロマーノは、静かに寄りかかるだけだった。

締め付ける胸の痛みが息苦しくなる一方のベルギーは、百年以上も想い続けた恋が、今後も叶わない事のように嘆く。

しかし、ただ見守る事しか出来ないロマーノにとっては、上手くいかない現状の方が不思議で仕方なかった。

一見には仲睦まじい2人が、未だに恋仲でなかったと云う事実を知つたのは、数年前であり、ひどく衝撃を受けた程だった。

積極的に前へ進もうとしないベルギーと、肝心な所で敬遠してしまふスペインに、もどかしさを感じるばかりだった。

柔らかく包み込まれる感覚と、鼻先をくすぐる甘つたるい香りに、静かに目を閉じたロマーノは、ベルギーには聞こえない程

度に、嘆息じみた吐息を吐き出した。

遠目では和んでいるようにしか見えない2人を、少し離れた畑からぼんやり眺めていたスペインは、微笑ましい光景だと思いつつも、羨ましくてしかたがなかった。

鋏を握りしめている力が、必要以上に強くなっている事に気付いたスペインは、慌てて手を緩めたものの、今度は杖代わりにして凭れかかる。

自然に接するようになれるまで、それなりの時間を費やしたが、あの夜の事を後悔しない日はない。

日に日に美しく成長するベルギーに、心が躍るばかりのスペインだったが、迂闊に手を出したせいで、自分からの手出しは一切断られたと思っている。

自業自得とは云え、拷問に近いと嘆くスペインだったが、長く胸に秘めているベルギーの想いに気付ける程、敏くない。

気付かぬ想いは、何もないと変わらず、再び何かが起これば、今度こそ出て行ってしまうと、連想するばかりだった。

重苦しい溜め息を吐き出すスペインは、周囲に誰も居ない事を確認すると、静かに本心を漏らしていく。

「ロマはええなあ、無条件で可愛がつてもらえるんやもんなあ」  
涙目のまま和やかな光景を眺めていたスペインは、振り切るように鋏を持ち直すと、畑仕事に戻っていった。

それ以後も、ロマーノは、意思の疎通が上手くいかない2人から、絶大な愛情を注がれる反面、一方では羨ましがられる羽目に陥った。

次第に、言い難い苛立たしさを抱えたロマーノは、2人を近づかせようと試みるものの、元より要領の好くない事も手伝い、上手くいかない事だらけだった。

そんなある日、キッチンで夕飯の準備をしていたスペインは、小走りで駆け寄ってきたロマーノに、のんびりした笑みを浮かべた。

「お腹空いたんか？もくすぐ、夕飯出来るさかな♪」

呑気な口ぶりのスペインに、大きく首を振ったロマーノは、ひどく青ざめていた。

大きな瞳を震わせながら、ズボンを引つ張り始めたロマーノは、渾身の力で叫んでいく。

「それどころじゃねえ！早く来いっ！」

涙で潤む瞳を必死に堪える姿に、異変を悟ったスペインは、ロマーノを素早く抱き上げると、キッチンを飛び出した。

ロマーノは涙を零しつつも小さな指で指示し、その通りに走り続けたスペインは、廊下の途中で倒れ伏しているベルギーを発見した。

「ベルー！」

転がり込むように駆け寄ったスペインが、傍らにしゃがむと同

時に、腕の中からロマーノが飛び降りていく。

「ベル？聞こえるか？ベルギー？」

必死の形相で肩を抱え上げるスペインだったが、すでに高熱で朦朧としていたベルギーは、返答する気力もない状態だった。

一刻を争う事態に躊躇する暇もなく、軽々とベルギーを抱き上げたスペインは、そのまま寝室に向けて駆け出していく。

緊迫する空気の中、置いていかれないように、小さな足で必死に追いかけてくるロマーノだったが、それに構っている余裕さえない。

ベルギーの寝室まで一気に走り抜けたスペインは、労わるように優しくベッドへ寝かしつけた頃、移動の振動で辛うじて意識を持ち直したベルギーが、薄つすらと目を開け始めた。

熱で潤んだ瞳を震わせるベルギーに、心配そうに覗き込んだスペインは、力強く励ましていく。

「しっかりせえ！絶対に助けたるからなっ！」

押し掛かる苦痛よりも、迷惑をかける事の方が心苦しいベルギーは、沈むように重い手を気力だけで浮かせた時、スペインは受け止めるように強く握りしめた。

「心配せんでええー親分に任しときー！」

心強い言動に、小さく頷く事しか出来なかつたベルギーは、自分の意思とは裏腹に、涙で歪む視界が暗転していった。

気力も費えたベルギーは、浅い息を繰り返すばかりだった。

そんな痛ましい姿が、不甲斐なさを悔やんでいたスペインを、更に自責の念を駆り立てる。

張り裂けそうな痛みを抱えたまま、静かに手を布団の中に戻したスペインは、立ち上がる間際、苦痛に歪むベルギーの額へ、謝罪するように唇を落とした。

物音をたてないように室内を出ようとした時、いつの間にか追いついていたロマーノが、戸惑うような眼差しを向けてきた。

しかし、目先の事に気を捕らわれているスペインが、それに気付ける苦もなく、軽くロマーノの頭に手を置くと、憤りに沈んだ声で囁いた。

「ロマ、ベル側におったってな」

底冷えする程の畏怖に震え上がったロマーノは、青ざめた顔のまま、条件反射のように頷くのが関の山だった。

「…お、おお」

一昔前に戻ったかのような鋭い眼光を宿したまま、王宮へ向かつたスペインは、現状の確認を終えると、復興に向けての準備に取り掛かった。

最優先の救援体制に、異論を唱える上司達を黙殺したスペインは、躊躇なく国庫を開放させていく。

あらゆる方面へ手を尽くした支援は、何日も徹夜作業を招いたが、その甲斐もあり、数日後には、ベルギーが意識を取り戻した。

一報を受けて胸を撫で下ろしたスペインは、疲れ切った身体を奮い起しながら、家路へ向かつていく。

逸る気持ちを堪える事が出来ず、残り少ない体力に叱咤した途端、無意識の内に走り出していた。